

第38回

## 「まちとアートの底デカラ」 ～芸術は社会に何ができるか～

関西の衰退が叫ばれて久しいものがあります。関西の産業また都市再生を願う声も日増しに高まっています。しかしながら、硬直化した都市政策からは新たな産業や人材は生まれにくく、従来の手法やノウハウにも限界があります。

変化への胎動も見られます。市民社会からはNPOやコミュニティビジネスなど、創造的な発想と手法で、新たなまちづくり、人材育成を促す動きが生まれています。また、金沢や京都のように、芸術文化政策による都市再生への模索もはじまっています。

芸術文化の創造性を高めることで、市民の活力を引き出し、社会全体のクリエイティビティをどう形成すべきなのか。また、そこから政策や経済はどのように新たな基盤づくりをめざすべきなのか、関西再生のために、文字通り創造的な議論が求められています。

今回のセッションでは、いま芸術文化と社会の架け橋に奮闘する3人のゲストとともに、楽しくまた激しく語り合います。

11月7日(金) 18:30開会(21:00閉会予定)

【ゲスト】中山夏織さん(NPO法人シアタープランニングネットワーク代表)  
今中博之さん(社会福祉法人素王会理事長)  
猿田洋子さん(NPO法人こまがね演劇文化創造劇場事務局長)

- 会場…應典院本堂ホール
- 参加費…会員1,000円(一般1,500円)
- 主催…應典院寺町倶楽部

## いのちと出会う会

いのちについて語り合う場として定着した「いのちと出会う会」。11月と12月の予定をお知らせします。

第34回

### 11月20日(木) 「子どもたちに導かれて ～いのちの不思議」

話題提供者

鍼灸師・介護支援専門員 渥美寛さん  
障害を持って生まれてきたお嬢さん。病院で一度は死を覚悟された息子さん。二人の子どもさんに教えられた「いのち」の不思議。その不思議に魅せられ、転職された後の素晴らしい出会いの連続。本山博さん、山元加津子さんら、多くの方々に教えられた知識や体験談を(東洋医学的見地からも)お話ししてい

第35回

### 12月18日(木) 「元気で長生き PPKのツツ」

話題提供者

日本笑い学会副会長 昇幹夫さん  
「笑いとは体内の免疫力を活性化し、ガン細胞を破壊する」という吉本新喜劇での実験やモンブラン登山でガンを克服した生きがい療法の例を通して、笑いの効用を説かれます。また末期ガンから生還した多くの人々から学んだガンとの向き合い方や人生の生き方についても語っていただきます。PPKの意味については、当日のお楽しみ……。

※いずれも18:30開会、21:00閉会

S×D2003参加劇団による  
2Days Drama Cafe

昨年のコモンズフェスタでも好評だった「トークカフェ」。今年も、開催期間中の11月8、9日に実施します。

今年は昨年度と趣向を変え、舞台芸術祭「SPACE×DRAMA2003」に参加した7劇団が、それぞれの個性を発揮しながらカフェを運営します。演劇人たちの素顔に迫るこのチャンス、お見逃しなく!

また、8日には京都橘女子大学の学生たちと共同で、楽しくてちょっと激しいカフェを演出します。

(詳細は総合プログラムをご覧ください)  
※運営:千年枕、劇団鹿殺し、しかばんび、me-te-lui-lui×××、劇団アクスビ、特攻舞台Baku-団、満月動物園

### 【新入会員ご紹介】

(2003年10月19日まで)

前号以降にご入会いただいた方です。ありがとうございました。

○一般会員

【大阪府】

井上啓子 大阪市阿倍野区  
斎藤寿彦 大阪市天王寺区  
古芝保治 大阪市天王寺区

○個人会員

【大阪府】

阪井健二 岸和田市

サリュ VOL. 40

應典院寺町倶楽部のニュースレター

発行日 2003年10月20日  
(偶数月発行)

編集長 川井田祥子

スタッフ 池野亮、大塚郁子

発行所 應典院寺町倶楽部

〒543-0076  
大阪市天王寺区下寺町1-1-27  
TEL06-6771-7641  
FAX06-6770-3147

# Salut

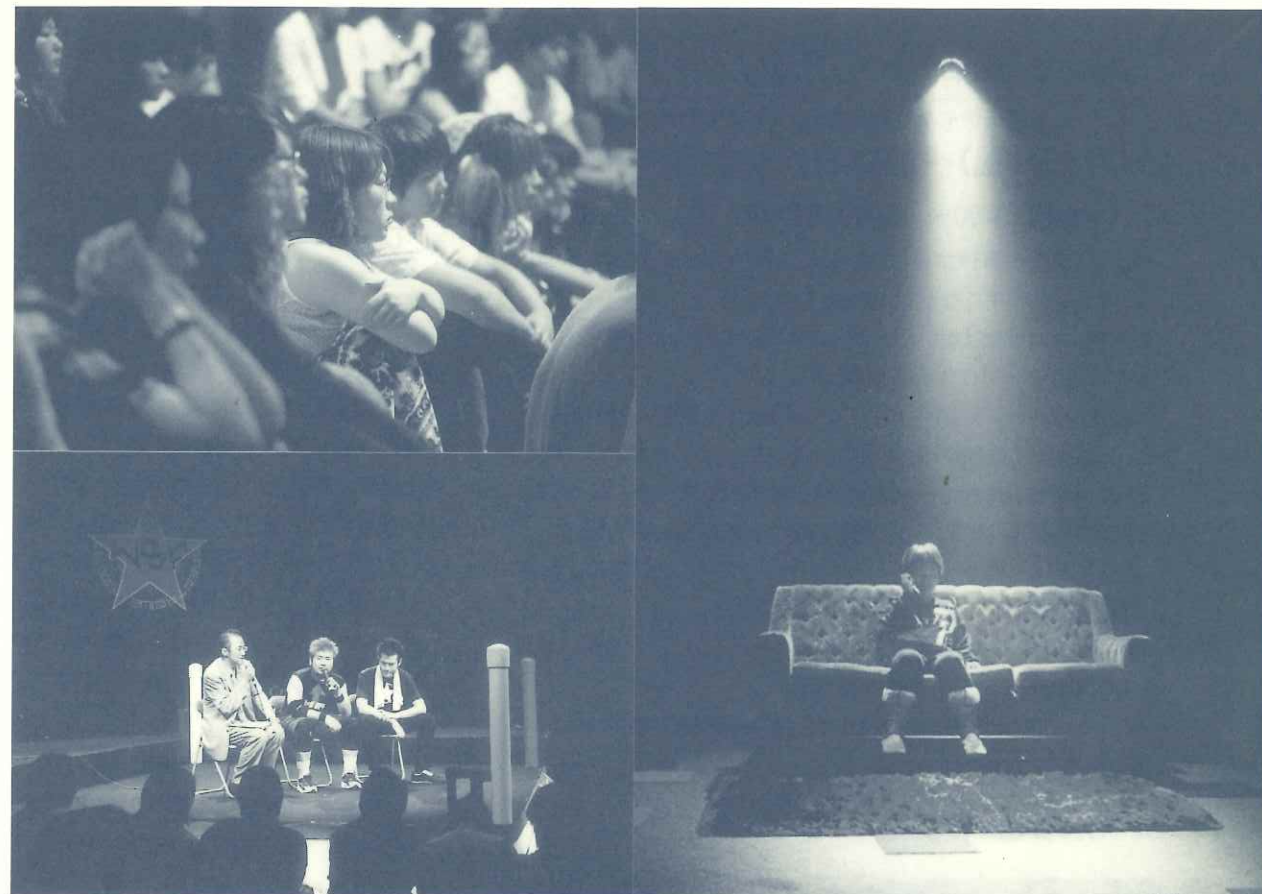
應典院寺町倶楽部のニュースレター

vol.

40

サリュ

フランス語で救いの意



## SPACE×DRAMA2003

## 特集号

2003. October

## いよいよ11月7日(金)からスタート!! コモンズフェスタ2003 Art Commons ~芸術で“ちがい”をつなぐ~

コモンズフェスタの開催が間近に迫ってきました。ここでは、寺町倶楽部主催の主な催しをご紹介します。

※詳細については、同封の総合プログラムをご覧ください。

### 【展覧会】「eternal~永遠」

※アーティスト:北山善夫、プロデューサー:樋口よう子

11月3日(祝)~9日(日) 10:00~19:00

(初日13:00~、最終日18:00まで) 入場無料

毎日、毎日殺人事件が目に見え込む。軽くカルクになった命。本当にぶっそうな世の中になってしまったものだ。

美術家・北山善夫は幼いとき、自らの生死をさまよった経験から、「生きる」ことをテーマに作品を制作している。

「死」からイメージする「生」、「生」から「死」に至る思いを絵で描くこと。現実に自分自身が「生きる」こと、そして、いつかたどりつく「死」。それは、まさに「eternal~永遠」のテーマである。アーティストの営みは時代を映す鏡。いま、じっくり見つめてみてはいかがだろうか。

(樋口よう子)

### <関連企画>

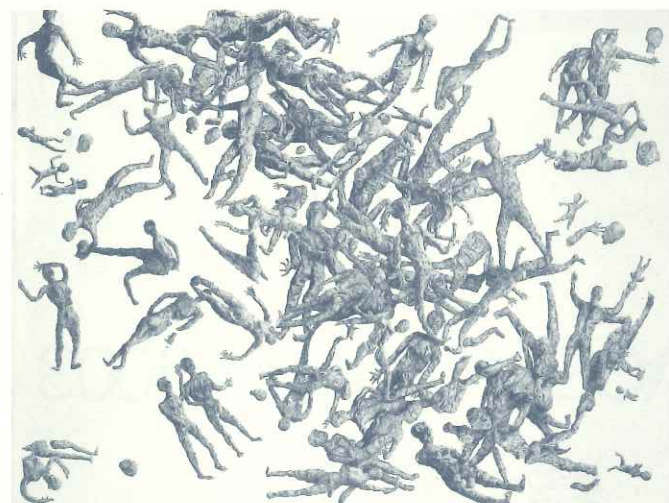
#### ◎「生を考える」ワークショップ

10月19日(日) 10:00~16:00

※この日に製作された参加者の作品は展覧会期間中、北山作品とともに展示されます。

#### ◎北山善夫による作品紹介

11月8日(土) 15:30~16:00



北山善夫作品「歴史は死者がつくった」

### 【アーツ・コラボレーション・プロジェクト】

#### 「交流~communication」

※アーティスト:岩下徹、プロデューサー:志賀玲子

私のダンスは即興です。この瞬間、本当に感じられる感覚に、そこに生じる動きの衝動に、できるかぎり誠実であろうとする“行為(アクト)”なのです。ここではすべてが生成変化の過程であり、完成することがありません。「~を表現する」という他動詞的な在り方ではなく、「~が表出する」という自動詞的な在り方で、観客の前に身ひとつで立つ。〈交感〉としての即興をめざして……。 (岩下徹)

<ダンス・ソロ公演「彼岸(かなた)から」>

11月8日(土) 15:00~15:20 入場無料 ※雨天決行

<ダンス・ソロ公演「此岸(ここ)から」>

& アーティスト・トーク>

11月8日(土) 18:30~20:45

前売/一般2000円、学生1500円

当日/一般2300円、学生1800円

<交流会「Art Commons Party!」>

11月8日(土) 21:00~21:45

参加費500円

<ダンス・ワークショップ>

「少しずつ自由になるために」>

11月9日(日) 12:00~14:00

一般2000円、学生1500円

※年齢やダンス経験は問いません。どなたでもご参加を。

<哲学カフェ「身体からわき出る言葉に耳をすます」>

11月9日(日) 14:30~17:00

ワークショップの参加者:無料、哲学カフェのみ参加:500円

## コミュニケーション能力をもった“制作者”との 連携で、劇場と劇団の関係を深める演劇祭に

SPACE×DRAMA2003をふり返って

今回から内容を一新した[SPACE×DRAMA2003]は約2年間にわたって若手劇団を支援する事業です。一般公募の後、選考した7劇団と合同制作会議を開きながら準備を進めたり、公演後に「アフタートーク」を実施するなど、“対話”の場を設けることに努めました。

新事業の成果と課題は何か。演劇界の事情に詳しく、実際に公演を観て下さった方々にお話を伺いました。

### 関西「小劇場演劇」事情

西島●まず自己紹介を兼ねながら、関西の演劇界、とくに小劇場演劇や若手劇団に対して感じていることをお聞かせ下さい。

林●今年の3月に大阪へ異動になり、舞台芸術を担当しています。東京では同じ部内にいたものの、演劇関連の記事は読む側の立場でした。比較して思うのは、関西の方が元気がよく、マスコミに登場する頻度が多いということですね。

作品の傾向としては、芸術性を追求するあまり、観客に対するサービス精神が不足気味の劇団があるかと思えば、「お客様は神様です」というノリの劇団もあって、多様化が進んでおもしろいところに来ているなと感じています。

今泉●私が演劇に関わったのは高校演劇からなので、50年近くになります。もともとは新劇(\*1)育ちなんですけど、「ユースサービス大阪」企画の「大阪春の演劇まつり」に関わりはじめてから若い人たちの演劇をよく観るようになりました。「小劇場演劇」についてのご質問ですが、いまままだ定義が明確ではありませんよね。アングラ演劇(\*2)は新劇に対するもの、「アンダーグラウンド(地下)から発信」という意味を込めたわけですが、その後の「小劇場演劇」はアングラ演劇の流れはくんでいるものの、いったい何をさすのか。小さな劇場でする芝居のことなのか、多様と言うと聞こえはいいけど、「何でもあり」の印象があります。

その一つの要因かも知れないのが、昔は中学演劇、高校演劇、大学演劇研究会、そしてサークル演劇という道筋が

あって、段階を踏みながら劇団に入っていた。つまり「線」でつながっていたのが、最近はそのような段階がなく旗揚げする若者が増え、バラバラで交流がなく、「点」のまま存在しているという感じです。林●大阪の南港で開催されたラフレシア円形劇場祭(\*3)は、劇団同士が手をつないだ良い事例かも知れませんが、関西の劇場がなくなるといった危機感があつたという要因もあるでしょうが、劇場づくりや運営に積極的に関わっていくような、複数の劇団が協力して何かをするという姿勢がもっとあってもいいでしょう。

### 人間関係を学ぶ演劇

西島●関西の小劇場のメッカと言われた扇町ミュージアムスクエア(略称:OMS)や近鉄劇場の閉鎖発表の前、スペースゼロ(\*4)が閉鎖されるという話を聞いた頃が、ちょうど「SPACE×DRAMA」という事業について考えはじめた時期でした。シアトリカル應典院はどういう役割を果たすべきかを考えたとき、スペースゼロのような役割を担う演劇祭ができないかと思ったんです。OMSや近鉄劇場のように、「いつかは、あそこ」とあこがれる存在ではなく、そこにたどり着くまでの基礎



## ◇ご出席のみなさん◇

## ★今泉おさむさん

日本演出者協会・会員／劇団・神戸自由劇場  
(演出)／劇評誌『劇場通い』同人

## ★林 隆之さん

日本経済新聞社社会部文化グループ記者

## ★西島 宏

應典院寺町倶楽部運営委員

## ★秋田光彦

應典院寺町倶楽部事務局長／應典院主幹  
※敬称略



今泉おさむさん



林 隆之さん



西島 宏



秋田光彦

体力を養える場所。失礼な言い方かも知れませんが、旗揚げはある意味、弾みや勢いでできてしまうわけで、実際、劇団員たちに聞くと、「5年の壁を越えられるかどうかは大きな課題だ」と言うんです。それで、旗揚げ5年以内の劇団を対象にしよう、もう一段階上がってもらうための演劇祭にしようと考えました。

今泉●本当にいい着眼点ですね。自分自身の環境が変わったり、劇団内部でも摩擦が起こりはじめるとか、いろんな意味で節目となるのが5～6年目です。

秋田●私は芸術の中で、演劇ほど人間関係を学べるものはないと感じてんです。映画や音楽のように簡単にコピーできるものではないし、必ず一つの場に集まって、リアルな関係を築きながら作品を作っていくかなくてはいいけません。ときには衝突もあるでしょうが、それらのやっかいなものを抱え込みながら、お互いを理解して作品を作っていく。そこに應典院というお寺が演劇をやっていることの意味もあって、さまざまな事業を展開している根底には、失われてしまった人と人とのつながりを回復したい、その人がその人らしくありながら、

他人とゆるやかにつながっていく場を提供したいという思いがあります。

西島さんが話したように、事業の立ち上げの時期に劇場閉鎖のニュースを聞いてショックを受けました。でも、このショックを逆に、劇場と地域、演劇と地域を結び直す再編の機会だと捉えることはできないかと思ったんです。

今泉●劇場や地域との関係以前に、いまの若者劇団はお互いの舞台を見て学ぶという姿勢があまり感じられません。應典院の演劇祭では、バラシを手伝うために他の参加劇団が応援に来ていましたね。お互いの作品も見合っていたようで、すごいことだと思います。演技だけでなく音響や照明なども、他の劇団のやり方を見ることがいちばんの勉強になるので、他劇団と密な交流ができる機会は大切です。

林●ラフレシアの参加劇団もお互いの公演を見に行くことはしていましたね。枠を取っ払うことのできる演劇祭は貴重ですよ。

西島●ただ、それが負担になってる面もあるようで……じつは次年度の参加劇団

の申し込みが今回より少なくなっていて、その原因は密度の濃い交流のせいじゃないかと内部では言ってます(笑)。

## 自己完結しない回路づくり

今泉●若者劇団が作る作品について感じるのは、深く人間の変化を掘り下げた作品が少ないこと、近未来を描いたものが多いこと。近未来だと「何でもあり」で舞台を作ることができますから。

西島●今回の参加劇団の中でも、どんな新しい表現にチャレンジしている劇団がありました。最初に「何が小劇場か」というお話もありましたが、そういった定義にはおかまいなく、当事者である演劇人たちはもう次の段階へ進んでいるのかも知れません。彼らの話で印象的だったのは、芝居の物語の背景にあるのは大きな物語ではなく、蓄積したデータ。そのデータの中から引き出したモノを羅列して見せる、そんな手法で作品を作ることもあるということです。

林●私の思い込みかも知れませんが、

昔の文学者や創作者は、まず自分の中に乗り越えたい問題やテーマがあって、その解決のために創作活動をしていただけど、いまは衝撃的な事件やモチーフにパッと飛びついてしまう。素材選びに一所懸命というか、「自分はなぜ創作活動をするのか」という深い問いかけがないように思います。

西島●それは、大事なものが抜け落ちていると言わなければならないのか、それとも新しい創作のスタイルだと言わなければならないのか、むずかしいですね。

秋田●だからこそ、そこで批評が大事になってくるのではないのでしょうか。まだ、海のものとも山のものとも判断できない若手劇団の批評はむずかしく、大きな思い違いがあったり、恣意的なもの入る危険性は大いにありますが、たんに「事業が無事終わった、たくさんお客さんが来てくれてよかった」というだけで終わるのではなく、そこに大人の視点を組み込んだり、双方向のコミュニケーションができる回路を積極的に作っていくことが必要でしょう。

西島●そのためには、作品を作った本人とどれだけコミュニケーションがとれるかも大切です。記者発表やアフタートークの場で、作家や代表を半ば強制的にでも引っ張り出しながら、自分のやっていることや作品を言語化する重要性に気づいてもらうことが、この演劇祭のもうひとつの役割だとも言えます。

今泉●最近の演劇人たちは、仲間内ではいろいろな意見を言っても、一歩外へ出ると何も言わない者が多いと思います。演劇には観客が必要だし、外部へのアピールは重要なので訓練も必要です。自

分の世界を開き、広げる努力をしていかないと先へは進めませんよね。

西島●じつは制作会議の中で、自分の言いたいことは作品で表現しているから、アフタートークでは改めて言いたくないという意見もあったんです。そういう意見に対して私たち事務局側は明確な意見を持ち合わせてなかったで、中途半端なまま進めてしまったんですが、いまなら「そうじゃない」と言えますね。作品で語ってるから言葉にしなくていいというのは、自己完結の典型のようなものでしょう。

## 「対話」できる制作者の育成を

西島●この演劇祭は「制作者の育成」を主眼に実施しましたが、「制作」とはいったい何をさすのか、これまた明確には定義できないものだし、主催者側に十分な制作ノウハウのストックがあったわけではなく、参加劇団と学び合いながら事業を進めてきたというのが正直なところですよ。

シアトリカル應典院は「第三の劇場」というか、公立ではなく民間だけど、演劇の専門スタッフが大量にいるわけでもなければ、営業ベースで成り立っているわけでもありません。にも関わらず演劇祭を立ち上げたんですが、最近、公立の劇場でよ

く似た主旨の事業がはじまりました。人材面でも経済面でもあまり豊かではない私たちが、この事業をどう継続していくべきか、じつはかなり悩んでいます。

林●「制作」をメインに打ち出して、劇団の制作体制、つまり「作品を制作する」という意味でのプロデュースをコンテストで競う形にした方が、この演劇祭の主旨がはっきりするし、應典院という劇場の特長も明確になるのではないのでしょうか。

最近では劇団員の中で、プロデューサーという肩書きの名刺をもって、あちこちを回る人が増えてきました。対話できる関係を作る、人間関係を築いていくというのは、まさに制作の仕事でしょうし、重要な役割だという認識ができてきたわけです。

「プロデューサー・コンテスト」というと大げさかも知れませんが、他劇団との交流やマスコミへのアプローチも各劇団のプロデューサーが積極的にしていくという方が、募集する劇団の対象も明確になるし、ノウハウやスキルのない劇団には、演劇祭で伝えていくというシステムはどうでしょう。

西島●すぐに実現するのは無理でも、5年の壁を超えて10年、20年をめざす劇団を対象にした場合、そういう形もあり得るでしょうし、先が見えたように思います。今日はどうもありがとうございました。

## SPACE×DRAMA2003活動記録

|                                   |                                 |                          |                    |                    |                  |                  |                            |                           |                  |                   |                                      |                     |                     |                     |                                 |                       |                       |                            |                      |
|-----------------------------------|---------------------------------|--------------------------|--------------------|--------------------|------------------|------------------|----------------------------|---------------------------|------------------|-------------------|--------------------------------------|---------------------|---------------------|---------------------|---------------------------------|-----------------------|-----------------------|----------------------------|----------------------|
| ▼6月25日～9月20日<br>【2002年】<br>参加劇団公募 | ▼10月1日～4日<br>選考会(連続4日間 26劇団の面接) | ▼10月9日<br>結果通知(参加決定は7劇団) | ▼10月28日<br>第1回制作会議 | ▼12月23日<br>第2回制作会議 | ▼2月3日<br>第3回制作会議 | ▼4月7日<br>第4回制作会議 | ▼5月12日<br>共通パンフレット①完成 広報開始 | ▼5月16日<br>記者発表&観劇モニター募集開始 | ▼6月9日<br>第5回制作会議 | ▼6月30日<br>第6回制作会議 | ▼7月14日～16日<br>共通パンフレット②完成<br>第7回制作会議 | ▼7月29日～30日<br>千年枕公演 | ▼8月5日～6日<br>劇団鹿殺し公演 | ▼8月8日～9日<br>しかばんひ公演 | ▼8月12日～13日<br>「e-tea-time」×××公演 | ▼8月26日～27日<br>阪にてPR活動 | ▼9月2日～3日<br>劇団アックスピ公演 | ▼9月9日～10日<br>特攻舞台「サカサマ」団公演 | ▼9月22日～3日<br>満月動物園公演 |
|-----------------------------------|---------------------------------|--------------------------|--------------------|--------------------|------------------|------------------|----------------------------|---------------------------|------------------|-------------------|--------------------------------------|---------------------|---------------------|---------------------|---------------------------------|-----------------------|-----------------------|----------------------------|----------------------|

# 参加劇団 活動報告

## <各欄の見方>

### ★劇団名

(A) 劇団プロフィール

(B) 公演タイトル、動員数(招待客含む)

(C) 「SPACE×DRAMA2003」に参加して  
いちばん学んだこと

## 千年枕

**A** 代表の松木麻里子が情報誌等で団員を募り、1997年6月旗揚げ。劇団員は女性ばかり、わずか3名という状態で、7回目の公演にパワフルに挑戦。2001年6月の一心寺シアターPart2演劇祭に参加し、団員の松中清美が主演女優賞を獲得。第5回公演「チャリン狂〜ご町内の崇仏派の皆様〜」が第8回OMS戯曲賞最終選考に選ばれた。作・演出はいずれも代表の松木。基礎的演技力の向上や、制作、舞台芸術の勉強等、さらにパワフルな演劇活動を展開中。

**B** 「ギャル〜閉じません〜」  
7月14日(月)20:00→88人、7月15日(火)19:30→107人、  
7月16日(水)19:30→83人 合計 278人

**C** 個性の違う他劇団の作品を観て、表現方法の自由さを改めて実感。と同時に、抱えている問題の多くは共通していることも。その中から結果を出そうと精進している若い芝居人たちは、現在の自分を映す鏡になりました。「やりたいこと」に対して「やらなければならないこと」が鮮明になった気がします。このような機会に巡り会えたことに感謝!(松木麻里子)



## 劇団鹿殺し

**A** 2000年、髭の子チョピンと丸尾丸一郎の呼びかけにより旗揚げ。つかこうへい氏の作品を上演、半年の活動休止後、オリジナル作品で活動再開。戦争、革命、殺人等を題材に、人間のネガティブな感情の爆発を表現。ロックバンドによる生演奏など、土臭さ、熱さ、男気が「ガツンと殴ってギュッと抱きしめる」独特の世界を展開する。また、半裸の男たちによるセルフアンコール等、旺盛なサービス精神で「劇場に入ったときから帰るまで」のお楽しみがもりだくさん。

**B** image  
7月29日(火)19:30→134人、7月30日(水)15:00→136人、  
7月30日(水)19:30→138人 合計 408人

**C** 意見を聞けることの幸せ。「SPACE×DRAMA2003」に関わる多くの方々に作品を見てもらえて、いろいろな目から見た劇団の強み、弱みを知ることができた。また、演劇についてのさまざまな見方や取り組みを肌で感じることができて、元気をもらった感じです。人との出会いが何よりの成果。(髭の子チョピン)



## しかばんび

**A** 2001年8月大橋学としばなぎが中心となり旗揚げ。劇団員は現在6名。恋愛やコモンセンスといった現代人の抱えるさまざまな問題を底辺に、やさしく、ときに痛烈に心の痛点を刺激する物語を紡ぐ。代表・作・演出の大橋学は学生時代、「CAMPUS CUP」に参加したこともあり、そのひと癖もふた癖もある戯曲と個性的な役者陣とで鮮やかに観客を物語へと引き込んでいく。2003年は“世代は死を内包する”をテーマに、死ですら人生の選択肢にしている現代人をリアルに描く。

**B** ひトで  
8月5日(火)19:00→108人、8月6日(水)15:00→65人、  
8月6日(水)18:30→65人 合計 238人

**C** 「SPACE×DRAMA2003」に参加したことで、自劇団の問題点がいくつか見えました。作品制作においての未熟さ、売り込みの積極性のなさ、意欲等々です。結成5年以内の7劇団それぞれを見ると、私たちにないものをもっている劇団、私たちの視野にはなかった活動をしている劇団とさまざまで、私たち「しかばんび」は自分たちの可能性をもつと貪欲に求めていかなければ、と思いました。結成3年目のいま、参加できて本当によかったと思います。(岡本真生子)



## me-te-lui-lui×××(メテルイルイ)

**A** 「あたかくせつない物語」をテーマに、セピア色の世界を作り出す。人間のもつ不自由さと可能性を愛し、心の溢れる舞台をめざす。現実主義からファンタジー、ダンス、映像と、日々、本気の実験を繰り返しながら、たかが板の上で繰り広げられる偽者の世界の可能性を信じ、本物を超えた真実をつかめればと、模索している。

**B** 楽園。  
8月12日(火)19:30→70人、8月13日(水)14:30→72人、  
8月13日(水)18:30→61人 合計 203人

**C** いままで自劇団の中だけで、かたしやうにがんばってきたのですが、今回、まったく違う6劇団と触れ合うことにより、自分たちというものを見つめ直す機会がもてました。刺激を受けたり落ち込んだりもしましたが、また「ゼロ」に戻って、あべき場所、これから進みたい形を再確認することができ、とても有意義かつ楽しい経験でした。(山本セリ)



## 劇団アクスピ

**A** 堤俊樹を中心に1997年、旗揚げ。旗揚げから東京・萬スタジオのBACKUPシリーズに参加し、翌年の選抜大会で関西唯一の劇団として選出される。テーマはつねに人間賛歌。物語を通じて登場人物が変化(成長)する様を描き、そこには必ず現代人が抱く苦悩や苦闘にどう立ち向かって生きるかを問う、熱いメッセージを吹き込む。アクスピとはアクターズスピリット(役者魂)の略称。その名のごとく、まさに旋風を巻き起こすべく突き進む熱い魂の集団である。

**B** OUT OF THE HOLE  
8月26日(火)19:00→126人、8月27日(水)15:00→75人、  
8月27日(水)18:30→87人 合計 288人

**C** ほとんどの参加劇団が、代表の方が制作会議に出席していたことから、会議を重ね、公演に向けて協力しあう中で、すべてではありませんが、その劇団としての方向性・考え方を学ぶことができたと思います。これらはさまざまな面で今後の自劇団の活動の参考になり、プラスにしていけると感じることができました。(石井テル子)



## 特攻舞台Baku-団(トッコウブタイバクダン)

**A** 2001年結成。演出は謎の覆面レスラーBaku-団マスク。人の生きようとする欲求「リビドー」をエンターテインメントの形で表現する「リビドーテイメント」を展開。また、福祉団体の要請を受けて上演した第3弾公演「病的船団」のほか、寺院の境内で野外公演を行った第4弾公演「Live my Place!」など、既存の演劇の枠組を越える挑戦にも意欲的。終演後のおまけ公演「爆発的紙芝居〜Baku-団マスク」も要注目。

**B** トゥルーフェイスとオンド  
9月2日(火)19:00→51人、9月3日(水)13:00→75人、  
9月3日(水)17:00→65人 合計 191人

**C** 平日公演であっても魅力的なアピールをすれば、お客さんは確実に観に来て下さるということを、結果として残せたと思います。また、1年を通じて重ねた共同制作の結果、有意義な関係を築くことができました。これまで劇団関係の希薄だった我々にとって、貴重なつながりを得ることができました。(松枝巧)



## 満月動物園

**A** 1999年2月、大阪市立大学劇団カオス出身の戒田竜治を中心として、舞台表現活動を行う団体として結成。空間固有の魅力を引き出していく中で、自分たちの魅力をも引き出していくことを主眼に活動。作品発表の場所の選定にもっとも気を配る。また、人間の発する言葉への懐疑という視座を貫き、五感を触発する舞台をめざす。次回公演は3月27日(土)・28日(日)、神戸アートビレッジセンターにて「ツキノアパラ」。

**B** 「SaD⇄SaD 〜サドサド〜」  
9月9日(火)19:30→73人、9月10日(水)13:00→82人、  
9月10日(水)19:00→49人 合計 204人

**C** ややもすれば自団体内に閉じこもりがちであったが、劇団間という横のつながりによる、作品性の変容の可能性を感じられたこと。良い影響を与え、与えられ続けたい。(戒田竜治)



※7劇団動員数計: 1810人

## 改めて知った、小劇場演劇の魅力 ～観劇モニター座談会

[SPACE×DRAMA2003]では観劇モニターを一般公募し、小劇場の演劇に触れていただく機会を設けました。それぞれのお気に入り作品や、モニターに参加した感想などを伺ってみると……。

### 自分がいちばん気に入った作品とその理由

奥田●①か⑥。私は減点方式で芝居を観てしまう方なのですが、この2つはアラが少なかったです。①は最後まで飽きずに観ることができました。⑥は解説者席を作るなど、プロレスという素材をうまく使っていましたね。でも、最後が間延びしたのが残念です。

桂●4作品の中では選択不能……。旗揚げ5年以内の劇団なのに、音響や照明、舞台美術などのクオリティが高いなと思ったんですが、4つの劇団の個性が感じられなくて……。以前、東京で一世を風靡した劇団「ショーマ」のスタイルとほとんど同じだと感じてしまったんです。僕自身、古いスタイルの芝居を作っているの、あまり偉そうなことは言えませんが、音響や照明の効果に頼るのではなく、中身や会話にこだわってほしいですね。でもこれは、参加劇団を選んだ事務局側の問題かも知れません。

白澤●①か⑥。いちばん心に染みたのが①で、⑥は個人的に勢いのある芝居が好きという理由です。ただ、①は役者がちょっと弱いという気がするし、⑥は若いからこその芝居だと思うので、そのあたりが今後の課題でしょうね。荒さも少し目につきました。

古川●⑤。すべてのセリフが聞きやすかったし、飽きることなく最後まで楽しめました。突然、天井から役者が降りてきてビックリしたけど、会場全体が一つになれたように感じました。

松本●④。ほとんど舞台セットのない所で、しかも役者全員出ずっぱり、そんな状態でさまざまな場面や情景を表現していることに感動しました。話の内容も、生きていく上で答えの出ないモヤモヤなどをよく表していて、すごく共感できました。

圓尾●いちばんは⑤、次が⑦、3番目に③。無責任なことを言ってしまうといけないと思い、自分で評価表を作ってみました(12の評価ポイントを設定、それぞれ5点満点で採点)。⑤は60点中の46点。③と⑦も僅差だったんですが、⑤は内容がわかりやすかったし、庚申信仰(見猿・言わ猿・聞か猿)を自ずと思い浮かべられてよかったんです。私は古典的な芝居をよく観ているので、伝統的なものと現代的なものとの接点を考えてしまうからかも知れません。

矢田●③か⑥。⑥は理屈抜きにおもしろかったし、私にはとても新鮮でした。脚本がしっかりしていて、個性豊かなキャラク

### 観劇モニターになった感想

奥田●7劇団のうち6劇団は、はじめて観る劇団でした。ふだん、自分でチケットを買って観に行くのはどうしても限られてしまうので、新しい出会いや発見があってよかったです。ただ、アフタートークの終了が10時前になった日はきつかったですね。

古川●お昼の公演があって参加しやすかったし、いろいろな作品を観ることができてよかったです。それに、自分の意見を求められていると思うと、「絶対に行かない」という気持ちになりました。あと、私は10月末に学年劇をする予定なんです、いろいろなヒントを得られたし、先生に自分の意見を積極的に言うようになりました。松本●正直に言うと、若手のお芝居だと、いうので最初は期待していなかったんです(笑)。でも、実際は各劇団ともよくて、毎回違ったカラーの作品で楽しめました。圓尾●小劇場演劇というものにはじめて

### <出席者(50音順、敬称略)>

※右の丸数字は鑑賞した作品

奥田桂子(30代、会社員) ①③～⑦  
桂 正樹(20代、劇団主宰) ②③④⑥  
白澤英司(30代、カメラマン) ①～⑦  
古川ゆかり(10代、中学3年生) ②③④⑤  
松本恵美子(30代、会社員) ①～⑦  
圓尾博一(60代、無職) ①～⑦  
矢田喜代(40代、会社員) ②～⑦

### <作品名>

①「ギャル～閉じません～ (千年枕)  
② image (劇団鹿殺し)  
③ひとで (しかばんび)  
④楽園。 (me-te-lui-lui×××)  
⑤OUT OF THE HOLE (劇団アクスビ)  
⑥トゥルーフェイスとオンド (特攻舞台Baku-団)  
⑦SAD⇄SAD (満月動物園)

ターがよく描かれていたし、とくに観客である私たちが、プロレスを観戦していることにもなるという設定がおもしろかった。⑥を観るまでは③がいちばんよかったんですが、少し無駄なセリフがあったり、無理に笑わせようとしている箇所が気になりました。

触れましたが、とてもいい経験になりました。苦言も含めていろいろ勝手なことを言わせてもらいましたが、各劇団とも一つの作品を完成させるまでに多大な労力や時間を費やして熱心に取り組んでいることがよくわかりました。今後の要望としては、アフタートークとセットになる場合の開演時間を早めていただけるとありがたいです。

矢田●いままで新劇系の芝居を観ることが多くて、小劇場演劇にはじめて触れましたが、楽しかったです。新劇より應典院で観たお芝居の方が新鮮で響いてくるんですね。新劇は見えないカーテンがあるというか、役者のエネルギーがカーテンに遮られて舞台へ跳ね返って観客に伝わらない、そう感じました。これから小劇場の芝居を観に行きます。

## 三者協働プロデュース公演は「劇団鹿殺し」

約2年間にわたって若手劇団を支援する[SPACE×DRAMA]。7劇団の連続公演の後に選考メンバーは、翌年夏に開催する<三者協働プロデュース公演>を上演する劇団の選考を行いました。作品づくりに対する意欲はもちろん、準備段階でのやりとり、観劇モニターの感想、観客数など、総合的な観点から話し合った結果、「劇団鹿殺し」を選出しました。

※三者……應典院寺町倶楽部、シアトリカル應典院、(選出された)1劇団



## 次年度の準備も着々と進行中!!

## SPACE×DRAMA2004参加劇団決定

今年度の連続7公演開催と、ほぼ同時並行で次年度の参加劇団も募ったところ、計13劇団から申し込みをいただきました。書類選考の後、9劇団の方々と直接話す機会を設け、最終5劇団を選出しました。

### ◆2004年度参加劇団◆

「劇団ショウダウン」…①夏目邦夫 ②2001年1月 ③京都府京都市  
「劇団レトルト内閣」…①川内信弥 ②2001年3月 ③兵庫県西宮市  
「月曜劇団」…①竹中 諒 ②2001年1月 ③兵庫県西宮市  
「ネコノハナ劇場」…①殿井めぐみ ②2003年3月 ③大阪府豊中市  
「満月動物園」…①戒田竜治 ②1999年9月 ③大阪府大阪市

※①代表者氏名②活動開始日③主な稽古場所

### ■2004年度の公演スケジュール(予定)

・三者協働プロデュース公演

7月29日(木)～8月1日(日)

・SPACE×DRAMA2004 連続5公演

7月5日(月)～8月11日(水)

※いずれも月曜から水曜のウィークデイ公演

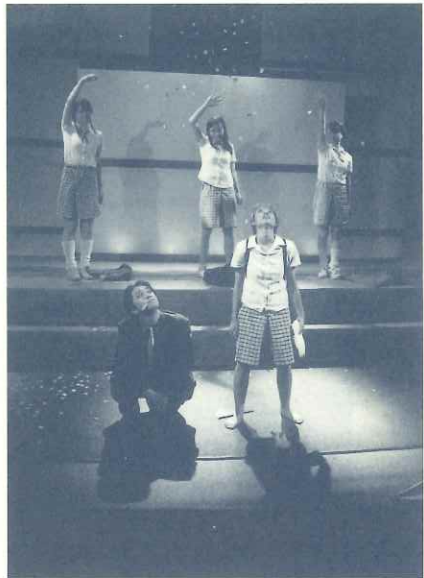
今後、劇団鹿殺しのメンバー、そして2004年度参加の5劇団とも協力しながら、より充実した事業をめざして準備を進めてまいりますので、会員のみなさまの応援をぜひお願いいたします。

### <選考メンバー>

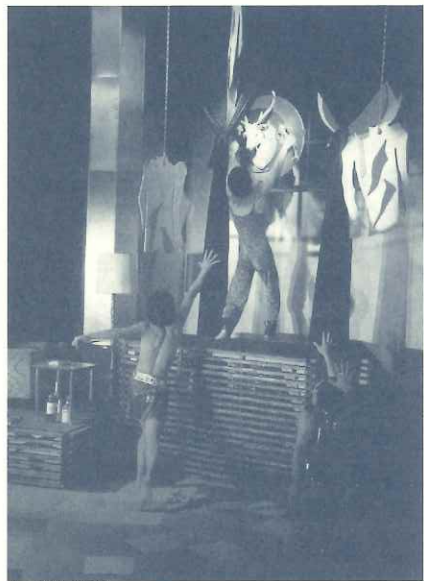
秋田光彦(應典院主幹)  
西島 宏(寺町倶楽部運営委員)  
池野 亮(寺町倶楽部事務局次長)  
川井田祥子(應典院ディレクター)  
柳澤尚樹(應典院スタッフ)

### SPACE×DRAMA2003新聞記事掲載一覧

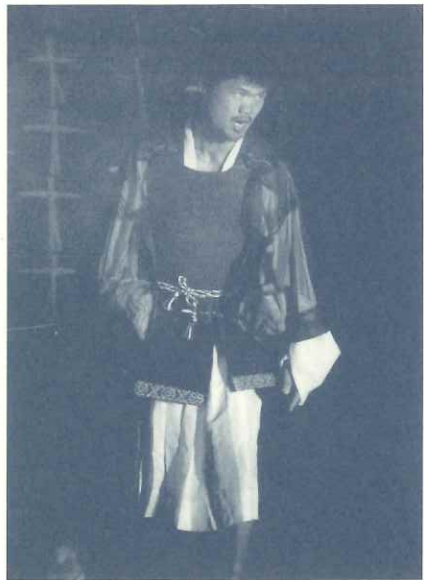
▼「2002年」  
9月9日 朝日新聞 夕刊  
「若手劇団を育成」  
「應典院が芸術祭参加募る」  
▼「2003年」  
5月31日 産経新聞 夕刊  
「制作段階から劇場と協力」  
「若手7劇団が芝居づくり」  
6月4日 大阪日日新聞  
「観劇モニター募集」  
「シアトリカル應典院」  
6月21日 日本経済新聞 夕刊  
「官民の劇場支援の輪」  
「芸術祭や講座を開催」  
6月21日 毎日新聞 夕刊  
「7月から舞台芸術祭」  
「大阪シアトリカル應典院」  
7月4日 朝日新聞 夕刊  
「舞台芸術祭で若手の才能発掘・育成」  
「大阪・天王寺で14日から」  
「スペース×ドラマ2003」



▲千年枕



▲劇団鹿殺し



▲しかばねび

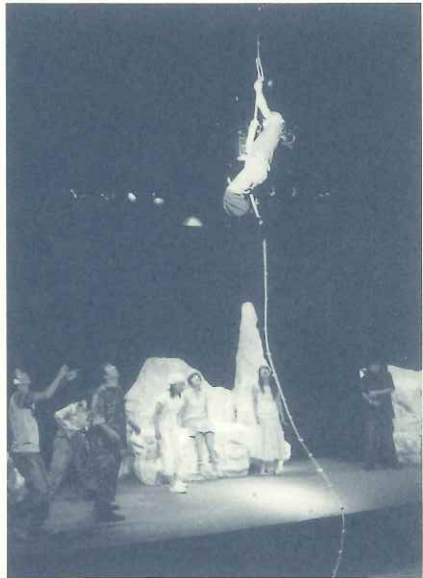
# 公演

## スナップ

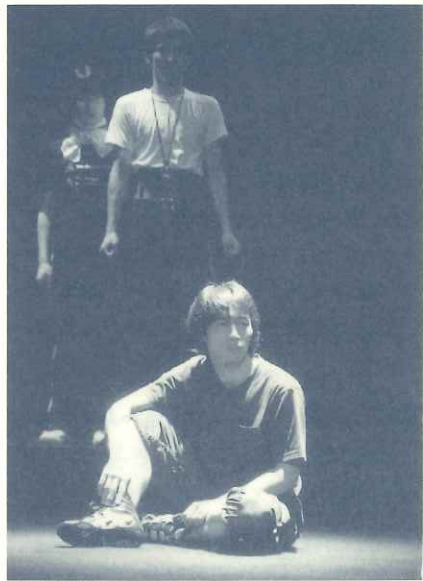
Photo/Eiji Shirasawa  
※P1～p10の写真すべて



▲me-te-lui-lui×××



▲劇団アクスビ



▲特攻舞台Baku-団



▲満月動物園

秋田住職発

# 應典院 掲示板

コツアー。中国、アメリカ、イギリス、韓国、ネパールなど国際色ゆたかな参加者が、下寺町、空堀、コリアタウンなどを周遊しました。下寺町では光明寺さんにご協力いただき、本堂で一緒に木魚を叩いたり、焼香をしたり、異文化体験を満喫することができました。

### ■エンディングサポートに50万円の助成

應典院の本寺である大蓮寺の社会事業、大蓮寺・エンディングを考える市民の会では、このたび住友生命社会福祉事業団の主催する「コミュニティケア活動支援プログラム」助成に参加、去る10月10日、東京での本選で田中いづみ事務局長がプレゼンテーションを行い、みごと最終20団体のひとつに選定されました。

すべての人が安心して快適に暮らせる社会と、人間同士のあたたかな相互支援関係づくりを趣旨とする助成事業だけに、本会の提案したエンディングサポートは、大きな評価を得ることができたようです。助成金は50万円、今後の本会の活動に活用されます。

### ■11月の講演予定

- 11月は後半に私の講演が続きます。
- ・11月25日(火) 大阪経済大学  
「地域政策オープンカレッジ」
- ・11月29日(土) クレオ大阪中央  
「はじめよう!コミュニティ活動」
- ・11月30日(日) 関西協同集会  
「市民参加のまちづくり」分科会
- ・12月2日(火) 大阪市街地再開発促進協議会  
「アートオブライフのまちづくり」  
時間や参加費については、各事務局までお問い合わせください。

先日、アートと社会を結ぶ「第1回アートNPOフォーラム」に参加してきました。全国からアートNPOの代表者や研究者、自治体職員など200名以上が集まりました。最近ではアートマネジメントを学ぶ学生も増えて、アートNPOの活動にも大いに期待が集まるところですが、2日間の議論に参加して、やや消化不良が残りました。

社会性を欠くお坊さんほど、出世間を気取るのとよく似て、アートNPOを自認する人たちの間には、まだ根強く芸術(作品・作家)至上主義を錦の御旗のように掲げる人がいます。それ自体は悪いことではありませんが、NPOはミッション(使命)を掲げ、自発的な社会参加をめざすもので、けっして特定の権益団体ではないはず。アートNPOという定義のよくわからない括りの中で、議論もしばしば自己矛盾に陥ってしまいました。

なんでもNPOにすればいい、という時代は終わり、すでに独自のビジョンや戦略を競う時期を迎えています。アートNPOが、作家や作品をも変質させていくのであって、アートの価値や意味をも変革していく役割があると、私は思っています。

應典院の独自のアートプロジェクトも、そんな視点で育てていきたいと念じています。

### ■はじめてのお盆の棚経

私が住職に就任して、はじめて迎えるお盆。新仏合同供養会、棚経、施餓鬼会、地藏盆と、8月はお盆行事で一色となりました。とくに棚経は、8月5日から15日までの10日間、総数232軒の檀家さん宅を参詣、文字どおり、夏の修行となりました。

これまででは隨身として先代に引率されてきましたが、住職として初の棚経、どちらのお宅でも歓待していただき、責任の重みを感じました。

### ■アートツーリズム快走

私が代表理事を務めるもうひとつのNPO「上町台地からまちを考える会」では、



上町台地の都心の魅力向上のために様々な事業を進めています。今秋から本格化、その第一弾として、9月28日「上町台地アートツーリズム」を開催しました。

上町台地のおもしろさを、外国人留学生に実際に自転車で行きながら満喫してもらおうと企画された、参加体験型の工

## 大阪府のコミュニティ・ビジネスモデルプランに選定!

去る9月8日、大阪商工会議所で大阪府生活文化部主催の「大阪・まちの賑わいづくり事業コンペ」の授賞式と記者発表が開催、受賞者の一人として應典院寺町倶楽部が選定されました(写真は受賞者の記念写真)。

同事業は、様々な文化事業をコミュニティ・ビジネスとして実施することによって、文化を支える仕組みをつくることと、特色ある地域文化の振興を図り、活気あるまちづくりをめざす事業プランを支援するもの。総数71の応募から5つの団体が選定、それぞれ支援金の100万円を受けました。

寺町倶楽部は、秋から来春までの期間の各セミナーをつなぎ、若年の人材育成、雇用支援の「大阪アートコミュニティ・プロジェクト」を提案、その斬新さと事業の精度が評価され、今回の選定となりました。大きな支援金を得たことの喜びはひとしおですが、それ以上にコミュニティ・ビジネスの先駆として責任を重く受けとめています。

